

使い魔？違う。俺は友達だ。

ふれんちと一すと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そーいやなのはに使い魔いなーって思ったので他の作品の案が思い浮かばない時に書こうと思った作品でも案が思い浮かばなかった時のために書こうと思った。

無責任？これが私だ！orz

まあ、全部ちゃんと完走するよ。

時間がかかってもね。

文が拙く原作が崩壊しています。

後、作者はなのはを二次創作でしか知らないから。

それでも良い方はどうぞ。後悔しない様にご注意下さい。

目次

1. 【あ、俺転生者っす。後、竜やってます。】 | 1
2. 【吸血鬼？なら俺竜だけど？】 | 13
3. 【月村さんの家にお呼ばれました】 | 20
4. 【俺の名前が決定する程度のお話】 | 23

1. 【あ、俺転生者つす。後、竜やってます。】

「ここはどこだ？」

第一声はとりあえずこれだ。

ノルマ達成かな？主人公として。

「いやいや、主人公はなのはだから」

「いきなり転生先が分かった件について」

このやり取り。間違いなく転生モノの二次小説だ。

まあ俺、なのは知らないんだけどね。

まあそれは置いて・・・

「喜ぶとでも思っていたのか？」

「え？」

俺は遠慮なく向かいにで余裕こいてたお兄さん？的な人にぶちかました。

「ぼくは絶対ゆるさない！」

「ちょブラツkぴちゅーん！」

何故僕がキレテイルか教えよう。

僕は今高校三年生だった。

大学も決まり、夢もある。

大学が決まった事でこれをキツカケに明日、一世一代の告白をしようと思っただけだ。

まず周り！よくある真っ白な部屋って表現！

間違いなく転生の間って呼ばれるやつじゃないか！

つまり、

俺がいるのは転生の間↓

生きた人間はここに来れない↓

てことは俺は死んでいる↓

3年間片想いしてた相手への告白する勇氣は無駄に↓

↓ふざけるな！

↓いま(こ)

「お、オオクニヌシです！」

*オオクニヌシはスサノオの息子です☆

「自分の子供に押し付けず自分たちは来ない？」

やるか」

俺は奥に向かって駆け出した。

「あつー！ちよつとー！」

静止？そんなもん無視だ！

俺は奥の扉をぶち破った。

—————

酒を飲むスサノオとツクヨミ

「スサノオ？これでよかったのか？」

「良いんだよアニキ、やっちゃったもん仕方ねえしあいつにも良い経
験になるだろ」

「だがなあ・・・」

「おいアニキ？どうかしたのか？」

「なんか嫌な予感が・・・」

いきなり扉が吹っ飛んできた。

「え？」

「どれッ！手合わせ願おうかッ！」

〜粛清中〜

一時間後

「ごめんなさい！すいませんでした！」

「いや、許さんよ？許して欲しけりや俺を日常に返せマジで」

「それは出来ません」

背後からオオクニヌシの声が聞こえた。

「ほう？それは何故？」

次の言葉に俺は啞然とした。

” 貴方はもうあの世界から消滅したのです ”

消滅ってことは記憶のかけらすらあの世界には残されていないのか？

「もう・・・戻れないのかよ・・・クソ！結城さん・・・」

「彼女と会いたいのか？」

スサノオが話しかけてきた。

「・・・いやいい」

なんか神々が驚いて此方をみてる。

「なんでか聞いても？」

ツクヨミが話しかけてきた。

「死人じゃあ彼女への枷がデカ過ぎるし、消滅ってことは俺のことは分からないんですよ？」

みんなが黙って此方をみてる。

「じゃあもうとつとと転生させてよ・・・」

僕は投げやりにそう言った。

「じゃあこれはお詫びだ」

いきなりツクヨミが俺の頭に触れた。

目の前に結城さんがいる。

僕は迷いもなく告白した。

例え幻影だったとしても伝えて起きたかった。

違う、幻影だと思ったからこそ伝えられたんだ。

畜生。

『ー君』

喋った？

『ー君、私は貴方の事覚えてるよ』

『困ってる人はほつといて置けない優しい人』

『だから！また会おうねきつと！』

嗚呼、なんて残酷で美しい幻影なんだろうか。

それでも、最期に会えてよかったよ。結城さん。

僕は目を開けた。

オオクニヌシがいる。

「どうぞ、特典3つ好きなものをお選び下さい」

礼儀正しい良い子だな。じゃあ、

「ブレスオブファイア3の竜変身と全てのゾーンと

もう俺みたいな奴を作り出さないように約束してください。」

自分みたいな奴はもう見たくない。

なんか神々が泣きそうな顔してる。

お前らせいだけど故意じゃないんだからもういいだろ。

「それで良いのなら」

「そうかい、じゃあとつとに行かせてくれ」

「・・・はい！」

足元から光になって消えて行く。

サヨナラ、懐かしき日々よ。

「俺ら最低だな」

「そうですね、あんな誇り高い人間に何てことをしてしまったのでしょう」

「父さん、叔父さん」

「嗚呼」

「ええ、そうですね」

「「願わくば彼に神々の祝福を」」

少年が消えた世界では

『結城君、私に幸せな気持ちをありがとう』

一人の少女が静かに感謝を祈る。

目が覚めるとそこは家具の揃った一軒家だった。
手紙が置いてあったので読んで見た。

簡略化

1. 親、親戚はいない。

理由、竜の一族だから親戚等が居たら世界が崩壊しかねない。

2. お金は貯金がある。

学校に通い、卒業後の進路も問題なく暮らせるようにサービスしてくれるそうだ。

3. 君は今3歳だがもう能力は使える。

自分の脳内で使うゾーンを選択して変身、もしくは解除が出来る。

ただし、ハイブリッドは使用不可になっている。

さすがになのは型のドラゴンとかどうすればいいのってなるかららしい。

代わりにラーニングが出来るが原作通り覚えるのは若干面倒だから注意だそうだ。

とりあえず、出かけよう。外が暗いけど地形ぐらいは把握しないと。

置いてあった携帯をもつて置いてあった服に着替える。

ブレスオブファイア5の主人公みたいな服だなあ・・・

しばらく歩くと公園に出たので適当にベンチ座った。

なんか向かいに女の子がいる。

目からハイライトが消えとる・・・

ええい！ほっとけるか！

「どうかしたのか？」

「えっ？」

いきなり話しかけられて驚いてるのかな？

「なんか悲しそうだったからさ」

少女は此方を見つめる。

「話、聞いてくれる?」

「良いよ」

彼女によると、

簡略化

お父さんがトラックにひかれて大怪我↓

家族がみんな忙しくなっちゃった↓

迷惑かけないように良い子としてここにいる↓

↓いまここ

そうなのか・・・でもなあ・・・

「つまり、家族が信用出来ないの?」

彼女は目を見開いて此方を見てきた。

「そんなわけないの!」

「あのさ、家族ってのはお互いに気を遣わずに共に居てくれる人達だよ! 良い子にしてないといけないなんて理由にならないよ?」

「貴方に何が分かるの!」

彼女は泣きそうだ。

「ここで、「俺に頼れよ」とか「一緒に居てやる」なんて言っても依存になりかねない。

それはこの子の為にならない。

なら、

「じゃあ何で何も言わないんだよ?」

「!?!」

「お前は家族が知らない所で苦しんでのが嬉しいのか? 放って置いて気付いた時には手遅れってのがいいのか?」

「そんなわけ・・・」

「今実際に君が苦しんでるのを君の家族は知らない・・・でしょ?」

彼女は、ハツとしたかのように悲しそうな顔になった。

「ほれ」

「え？」

ハンカチ差し出した。

「泣きたいなら泣けばいい、存分に泣いたら家族に想いを伝えろ、それまではこのハンカチかしてやるから」

「……う……うわあ……うわああああん……」

彼女はハンカチを受け取るとそのまま泣きだした。

相当溜め込んでいたのだろう。

俺はそれを見守った。

あれから10分くらい彼女は泣き続けた。

俺には頭を撫でるくらいしか出来なかった。

「ありがとう……このハンカチ！洗って返すね！」

心なしか笑顔明るい。

良かったな。

「そんじゃ送ってくよ、流石に夜道は危険だしね？」

「うん！」

僕は彼女を家まで送った。

「そういえば自己紹介がまだだったの！私は高町なのはなの！」

俺は

「俺はリュウだ、よろしくな 高町」

「なのはでいいの」

「分かった……よろしくなのは」

「うん！よろしくね！リュウ君！」

そんな感じで夜道を進む。

彼女の家に着くと家の前には彼女の家族らしき男女が見えた。

「なのは！こんな時間まで何処行ってたんだ！心配したんだぞ！」

「ごめんなさいお兄ちゃん」

お兄さんかな？なんか木刀持ってるけど技とか出来るのかな？

すると、お姉さんがこちらを見ながら言った。

「……なのは、この子は？」

「この子はリュウ君！今日知り合ったばかりなの！」

なのはは声を弾ませながらそう言った。

そしてなのはは切り出した

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、大事な話があるの」

なのはが俺の手をギュッと握りしめる。

まっいいか。頑張れ。

「私寂しかった」

「!!」

「お父、さんが倒れて、みんな、バラバラ、みたいになっちゃって……
寂し、かったよ……!」

なのはは涙を流しながらそう呟いた。

不意に俺の手を離したので俺はそつと背後に下がった。

「なのは……すまなかった……!」

「なのは……ごめんね……!本当やごめんね!」

「お兄ちゃん!お姉ちゃん!」

ここで俺は邪魔にしかならんな。

俺はそつと立ち去ろうとした。

「待って!」

なのはが俺を呼び止めた。

「ありがとうリュウ君……ちゃんと伝えたよ……」

涙目だけど嬉しそうだ。

「言える内が花だよ……家族は大事にね?」

俺の答えにお姉さんが反応した。

「リュウ君は家族いないの?」

今はいないもんなあ……

「もういないよ」

そう答えたらなんか三人がこつちをギョー!と見つめてきた。

そしてお兄さんらしき人物が

「リュウ君?だったか、俺は高町恭也だ、なのは救ってくれてありがとう」

深々とお辞儀してきた。

「頭を下げないでください」

そういうの苦手なんだよなあ・・・どうも

「君さえ良ければ家に来ないか？一人ということは何処かの施設とかだと思うが」

「いいえ一人暮らしですよ」

「二家に来なさい（るの）！」「」

なんで満場一致なんだ。

「すみません、一人の方が楽なんです」

なんか迷惑かけたくないし。

こんなぼつと出のよく分からん奴を家に招くなよと思う。

「でも流石に今夜は遅い、家に泊まった方が良いと思わないか？」

「そうよ！恭ちゃんの言うとおりに！」

「リュウ君！良かったら・・・ダメかな？」

この家族、大丈夫か？こんな怪しいやつを？

そうだ！ラーニング試せるかな？

「じゃあ恭也さん、俺と時間制限30分で打ち合いしてください！」

なんか三人とも驚いてる・・・やり過ぎたか？

「・・・理由を聞いても良いか？」

「なんか木刀持ってるのでそういうった嗜みが有るのかと思いましたが、僕もそういったモノを覚えた強くなれるかな？って」

恭也さん暫く考え込んで

「分かった、なのはと話す時間もあつた方が良いだろう、今からで良いか？」

「はい！」

僕らはそのまま道場へ向かった。

「道着は？」

「慣れてるこっちの方が動きやすいので」

僕は小太刀一本。

向こうは二本だ。

「それじゃあやろうか？」

向こうが構える。

僕は軽くを閉じる。こうすると転生物って自分の技が見えたりするよね？

“ダブルヒット” “しんがん” “スーパーコンボ” “セブンセンス” “カウンスター”

何これ・・・

サービス？サービスなの!? 幾ら何でもこれいいの!?

「じゃあいくぞー!」

彼きた!? ええい! ままよ!

「セブンセンス!」

体が軽くなつた! 気分がいい!

軽くよければ!

「何!？」

「嘘・・・恭ちゃんの攻撃初見で避けた・・・」

「リュウ君・・・」

驚かれとる!? どんだけ人外扱いなのこのお兄さん!?

てかなのはさん、なんで顔赤いの?

「いい動きだ! ならこれはどうかな?」

お兄さんの動きを見ろ。覚えるんだ!

「はあー!」

隙が出来た! でも、明らかに態とらしい。

でもいくしかない! 何故か! ロマンさ!

まずは

「しんがん」

まだ攻撃が続いてる。

お兄さんが振り下ろした。

今だ!

「スーパーコンボ!」

時が止まる。

的がたくさん出てきた。

一つ一つ潰して行く。

1・・・2・・・3 4・・・5・・・

くっ・・・体が小さいとやはり限界が有るみたいだ・・・
だけど!

6!

「いっけええええ!」

気がついたらラーニングなど忘れていたこの戦いは

「何!？」

僕の剣が折れて、お兄さんの剣が片方はじかれて幕を下ろした。

お兄さんからは入門を勧められたが「僕には合わないみたいです」
と断った。

その夜

いくら子供だからってなのはと同じ部屋にするなよ。

僕はなのはの隣に布団を敷いて寝ようとしている。

「ねえリュウ君」

突然なのはが話しかけてきた。

「リュウ君の・・・その・・・家族って・・・」

それか。

「初めからいないよ、だから気にすんな」

「でも・・・」

「なのは」

「・・・」

俺はあの理不尽を覚えている。

「どんなに離れていようとも心で繋がってる、僕はそう信じてる」

「!?!?・・・そうだね・・・ありがとうリュウ君」

「礼なんて言われるようなことしてないよ、おやすみなのは」

「うん!おやすみ!」

そして僕は眠りについた。

2. 【吸血鬼？なら俺竜だけど？】

あれから三年経ちました。

え？いきなり展開速すぎないかだつて？

延々と家に来ませんかって誘われ続ける日常を写す気にはならな
いです。

まあ、なのはのお父さんが退院してなのはのお父さんまでもが勧誘
してくるのは予想外だった。

後、嫁さんと仲が良いのは分かるんですが甘ったるい過ぎる空間を
作りまくらないでください。

死んでしまいます。（口から砂糖が垂れまくって死ぬ）

なのはは、私立聖祥大附属小学校に通いはじめた。

俺？公立行こうとしたら無言で泣きそうな顔されたので一緒に通
わざるおえない。

しかも同じクラスで俺は窓際二番。

なのはは真ん中辺りだ。

余談だが、高町の家から聖祥に行くためのバス乗り場までの道に我
が家が有るのだが、どんなに早く出てもなのはと遭遇する。何故
だ……。

後、入学時になのはが殴り合いの友情をガチでやってのけた。

なんでも、すずかちゃんという子を虐めてたアリサちゃんという子
の虐めを止めるためにだったらしい。

で、喧嘩の末三人仲良しと。

漢か何かなのかな？

しかも、俺を巻き込むな……

喧嘩の後

「アリサちゃん！すずかちゃん！こっちこっち！」

「ちよつと待ちなさいよなのは！紹介したい奴って」

「待ってよなのはちゃん！」

なんか騒がしいのが来たなあ・・・

俺、名字考えてなかつけど特に問題はなかった。名前だけでも周りは気にもしてないからね。

「紹介するね！こちらリュウ君！私の友達なの！リュウ君！こっちはアリサちゃんとすずかちゃん！私の友達なの！」

「あんたがリュウ君？私はアリサ、アリサ・バニングスよ、よろしく」
素っ気ない子だけど強い目をしてるなあ・・・

「私は月村すずか、よろしくねリュウ君」

穏やかな子だなあ・・・

「・・・リュウだ、よろしく」

「ちよつとリュウ君!?テンション低くない!?何かあったの？」

「実はな」

「「ゴクリッ・・・」」

美少女三人が喉を鳴らす。

「眠い」

「「それだけ!?」」

そんな茶番があつたり無かつたり。

で、今俺が何をしているかというのだ。

この近くの廃工場で竜変身の練習をしている。

海が近く、滅多に人も来ない。

なのはと出会ってから、俺はこの場所を見つけ、なのは達からここにきている事がバレないように努力した。

バレたらロクなことにならない。そう確信している。
でだ、何をしているかというのだ

廃工場の一室に籠って竜変身の練習↓

廃工場の中に黒づくめのおっさん5人と女の人5人と高そうな服を着たおっさんが

バニングスと月村を縛って連れてきた。

「何すんのよこの誘拐犯！」

「氷村の叔父さん！どうしてこんな!?!」

誘拐されて来たみたいだ。

「取り敢えずそいつらを抑えろ」

「さてすずかちゃん？ここに君達を連れて来た理由だね？」

「・・・」

「月村を完全に支配下を置くためさ！」

「!？」

あいつ何いつてんだ？

「君らには忍達との交渉材料になってもらう」

人質で交渉後支配する。これは・・・

「ふざけんじやないわよ！この変質者！」

「見たところすずかちゃん？盟約してないけど友情ごっこは楽しかったかい？」

「!？」

「ちよつと無視してんじや無いわよ！」

「良いことを教えてあげよう？劣等種！」

「やめて叔父さん!？」

「この子は我らと同じ夜の一族、吸血鬼なのさ！君らみたいな劣等種とは違うんだよ？」

「うう・・・うああ・・・」

あのおっさんくそだな・・・

「そんなの関係無いわよ！すずかは私の友達よ！あんたみたいなクズとは違うのよ！クズとは！」

かつけえ・・・バニングス・・・なんて男前なんだ・・・

「ふん・・・気に入らないな、お前達、こいつを好きにしていいで！」

「やめて！アリサちゃんには手を出さないで!？」

おっさん共がいやらしい笑みを浮かべながらアリサに迫る。

俺は落ちてた鉄パイプを振りかぶって

「オラア！」

飛びかかった。

「なんだこいつグあ!？」

即座に足をダブルヒット

まず一人目！

その勢いで！

「「ぎゃあ!」「」

足元を薙ぎ払った。

これでこいつらは立てないし、痛みで動けない。

「!?なんだお前は!」

下衆なおっさんが俺を見て目を見開く。

「リュウ君!?!」

「リュウ!?!あんたいつからここに!?!」

「最初から」

そういうと月村は、悲しそうな顔で俺を見る。

「安心しろ、お前らは俺の“友達”だ、絶対守る」

そう言うと、月村は驚いた顔で嬉しそうに泣いた。

「ふん!たかがガキが!やれ僕の自動人形!」

突然走ってきた女5人は俺を囲むと

「ぐわあ!?!」

俺を弾き飛ばし殴りつけた。

クソ・・・なんて一撃だよ・・・これが人形・・・

「リュウ君!?!」

「リュウ!?!あんたら子供相手に!」

彼女達がそう叫ぶと扉が開いた。

二つ。

一つは月村そっくりお姉さんと恭也さんが。

もう一つはなのはが。

「お前達!無事か!?!」

「遊!あんた何てことを!」

「リュウ君!しっかりして!?!」

なのはが俺を心配して駆け寄る。

「忍・・・君も僕の元に着くといい!この子達の顔に傷をらつたくな

いのならね!」

「遊!あんた・・・何てことを!」

「くっ!?なのはを離せ!」

「動くなよ劣等種!こいつらがどうなっても良いのか!」

「くっ・・・クソ・・・」

歯痒そうに氷村を睨みつける恭也さん。

だが、俺はなのはに気を取られた。

「なのは・・・なんでいるんだ・・・?」

「リュウ君・・・いつも黙ってここにどっか行っちゃうんだもん・・・何をしてるかなんて分からないけど・・・リュウ君・・・相談してよ・・・!」

なのはが泣いている・・・

「信用してくれてないの?・・・リュウ君・・・教えてくれたよね?・・・辛いなら言っつて」

どして覚えてるんだよ・・・

「ちゃんと受け止めてあげるからね・・・リュウ君・・・」

なんで俺なんかに構うんだよ・・・

「うるさい劣等種が!そのガキ!まずその女から僕の物にしてやる!おとなしく見てろ!」

「なのはちゃん!」

「クソ!なのは!」

ダメだ・・・そんなの・・・

「リュウくん・・・」

ダメだ!

僕は静かに立ち上がる。

「なんだ?ガキ?まだ殴られ

「なのは・・・みんな・・・ごめん」

「リュウ・・・君?」

「リュウ!あんた何を?」

みんなが僕を見つめる。

「月村」

「え?」

「吸血鬼がなんだってんだ、俺なんか竜だぞ?」

「リュウ君？何を言って・・・」

俺は心に決めた一つを言う

「怖かったらもう俺なんかと関わんなくてもいいからさ」

「劣等種！何をのたまっている！」

こいつだけは許さない！

「ジーン選択！火！」

俺の周りを黒い半球体のドームが覆う。

「グギャア！」

ドラゴンパピー 火

「・・・ばかな!? 竜だと!? ありえない! やれ! やってしまえ!」

自動人形達が迫ってくる。

一気に焼き尽くす!

プチ・ブレス!

「グギャアア！」

火炎が自動人形達を焼き払う。

溶けていく。全て溶かして焼き払う。

後に残るは塵芥。

「ひっひい!? 来るなあ!」

一発くらいやがれ! 目つぶし!

「ぎゃあああ! 目があ・・・僕の目があああ!」

俺は竜変身を解く。

そして、

「この子達が劣等なもんか、寝てろ」

全力で腹パンした。

全て終わった。

もう彼女達とも会うことは無いだろう。

俺は立ち去ろうと、いや、逃げようと歩き出した。

「待って！」

唐突に後ろから抱きしめられた。なのはだ。

「リュウ君は・・・リュウ君・・・でしょ?」

「そうよ! 私達を守ってくれたじゃない!」

「怖くないよ・・・リュウ君・・・」

「リュウ・・・何があろうとお前はもう家族みたいなもんだろ?」

「リュウ君? いいのかな? あの姿、そこで寝てるバカよりずっとかっこいいと思うわよ?」

みんな優しいなあ・・・でもさ・・・

「これ・・・まだ本気でも何でもないですよ?」

俺は姿だけでもとアンフィニとエラーを選択した。

もちろん竜姿で。

「これでもですか?」

皆が黙ってる。

やっぱりこれで終わりだろうなあ・・・

そう考えていた。

「リュウ君・・・私はリュウ君に救われたの」

「リュウ君は私の気持ちをちゃんと受け止めてくれたの、私にとってリュウ君がなんであろうと関係ないの・・・だから・・・」

“ これからも一緒に笑っていてくれませんか? ”

ああ・・・

僕はなんて幸せ者なんだろうね。

「うん」

こう答えるしかないじゃないか。

それから30分間滑り台にされたがね。ちくせう。

3. 【月村さんの家にお呼ばれしました】

やあみんな。リュウだ。

今日は日曜日！良い天気だ！

今日は月村さんの家にお呼ばれされることになったよ。

12：40くらいに迎えが来るらしい。

今の時刻？7：30だよ？

朝御飯食べ終わったし、手ぶらで人の家に行くのもあれだしクツキーでも焼くことにするよ。

料理出来るのかって？

好きな子が料理好きだったんだよ。

まあ、それは良いとして生地は普通のとココアを用意してる。

まあ、もう焼いてるんだけどね。

少し暇だから何か技でも思い出せる限り思い出してみようと思う。

.....あ!?

そうだよ！スキル以外に魔法があったじゃん！

よし！思い出して練習しよう！

〜三時間後〜

予想以上に楽勝だったorz

まあ、テラブレイクとか攻撃はためてないけどリフレストとかは出来たしリバルとカリバルラもなんかも感じる波動？みたいなのが違ったらから多分出来る。

でもね。月村さんの迎えが来るには二時間半くらいあるんだよね.....

なにしようかな？

よし。準備しとこ。うん。

にしてもだ。昨日は竜変身のことを明かしたけどさ、皆物好きだよ。ね。怖がりもしないとは.....

嬉しかったけどね。

ただなあ・・・

滑り台になるカイザードラゴン?な。

なんかこう染み染みとしてくるorz

なんやかんやで迎えが来たみたいだ。

「こんにちは、リュウです」

「どうも初めましてノエルです、よろしくお願いしますね」

なんかお淑やかそうだなあ・・・

俺はそのまま車に乗り、月村家に向かった。

到着すると、忍さんと恭也さん、なのはにすずかにアリサが既に集まっていた。

「遅いじゃないのよ!?!」

「迎えが来たの12:40だよ?それよりも早く来たのか?」

「べ、別に良いじゃ無いの!」

ツンデレっぽいなあ・・・

「あ、リュウ君!」

「すずか?どうかしたの?」

「あ、あのね!昨日は助けてくれて・・・ありがとう・・・!」

良い笑顔だなあ・・・

「リュウ君?」

ふと振り向くとなのは良い笑顔を向けて来た。

「次黙って一人で苦しんだら・・・オハナシだからね?」

怖!?顔怖!?

「なのは・・・顔怖いぞ?」

「ふえ!?!」

恭也さんに指摘されて慌てる。

なのは昔からこんな感じだなあ……

「……あ・そうだクッキー焼いて来たからよかつたら皆で食べない？」

「あんたお菓子作れたの!？」

「わあ……リュウ君のクッキー凄い綺麗……」

「リュウ君上手なの!」

皆喜んで貰えて何よりだ。

この後、俺は月村家と盟約?なる物を結んでその後帰宅した。

余談だが、なのはがすずかとアリスに俺が一人で暮らしてる事が漏れたらしく二人からも住めと誘われるようになってしまった……

なのは……後でこつちがオハナシするべきかな?

4. 【俺の名前が決定する程度のお話】

とりあえず、何時迄も苗字が無いのもあれだから苗字を考えてみようと思う。

みんなから聞いてみよう。

アリサの場合

「え．．．えっとね．．．う、家の名前使えば」
却下

月村の場合

「うーん．．．リュウ君の苗字かあ．．．

月むr「却下！」

なのはの場合

「高まt「却下あ！」」

なんで皆考え方が一緒なんだ．．．というかなんで自分の苗字なんだよ．．．

結城さんの名前借りようかな．．．

〜二時間後〜

考えに考えた末、

「【リュウ・レイラント】にしよう」

3のレイとガーランドから取りました。

うん。あの二人はかつこよかったなあ．．．

この事を話した時の反応

アリサの場合

「．．．そんなすぐ決めなくたって良いじゃないの．．．」
なんでそんな悲しそうなのさ。

すずか（そう呼ぶように強制させられた）の場合

「そう！良かったねリュウ君！」

可愛い笑顔が見れました。イメージはアサガオ。

なのはの場合

「えへへ……私の名前じゃごろ悪いなあ……やっぱり母さんの言うように婿にするべきなの……えへへ」
すごくクネクネしとる……。

まあ、そんな事があつたりで今、俺は図書館にいる。

昔、転生前の俺は結城さんに告白以外に夢があつた。

ゲーム製作者になりたい。

俺は、ブレスオブファエアをプレイして感動したのだ。

面白い。楽しい。感動した。色々な感情をひつくるめて楽しめたのだと思う。

俺もそう思ってもらえるようなゲームを作りたい。

で、今はプログラミングやら設定資料になりそうな風景画。そして、小説。それらを読んで色々な世界観を覚えよう。

というわけで、今勉強中だ。

因みになのはは、家の手伝い。すずかとアリサは塾だそうだ。

気が付くと17:00を過ぎていたので帰る事にしたのだが、帰り道で

「すいません言うたやないか！」

「すいませんで許されるとでも思ってたのか！このガキ！」

車椅子の女の子転ばせて威張り散らすチンピラ×2車椅子の女の子。

そして、見て見ぬふりをする人達。

流石に女の子には手を出しちやいかんでしょ。

車椅子壊れてるし。

「いやや！離して！」

「大人しくしろ！」

とりあえず俺からの一言（と言う名のとびげり）

「暴行は犯罪です！」

「ぐぼお!？」

とびげりは顔面に入って一人はそのまま気絶した。

「おいあんたら!女の子になんてことしやがる!警察呼ぶぞ！」

「このガキ！」

掴みかかって来たので遠慮なく

「目潰し！」

「あぎやああああ！」

目潰しした俺は悪くないと思う。

「さっさと行かないと警察呼ぶぞ！」

「ちくしょう！」

目潰しされたやつは倒れたやつを連れて逃げ出した。

「ふう・・・すつきり」

「あ!あの！」

「うん？」

車椅子の女の子だ。

「大丈夫か?怪我はしてないか？」

「大丈夫や・・・ほんまありがとうな・・・」

女の子は嬉しそう顔をしている。

「気にすんなよ、さて・・・」

「どないしたん？」

「家は何処？」

「え?」

不思議そうな顔してる彼女。

「いやさ、車椅子壊れてるし送ってくよ」

「え?・・・でもいいんか？」

「困ったらお互い様だろ」

俺はその女の子を壊れた車椅子ごと持って彼女の家に向かった。

その時に気付いたんだけどこの子が呪われている。

何かこう、足からドス黒い何かが上がって来てる。

とりあえず、家に着いたので上がらせて貰うと

禍々しい何かを放つ本が。

「そういえば、自己紹介してへんかったなあ！わいは八神ハヤテや！よろしなあ」

元気だなあ・・・

「俺はリュウ・レイラントだ。よろしくな八神」

「ハヤテでええよ」

「分かったよハヤテ、所でこの本は？」

「ああその本？うちが産まれた時からあるみたいやで？よく分からん本やけど」

そこで俺は切り出した。

「なあハヤテ、少し後ろ向いててくれるか？」

「うん、良いで？何するん？」

俺は問答無用でオーラスマツシュをぶつけた。

すると禍々しい気配が霧散して消えた。

そして、

「ヤクリフ！」

ハヤテにヤクリフをした。

「ふわあ!?なんや!?体の痛みが引いたで!?何したん!？」

驚く彼女の手を俺は掴んで無理やり立たせた。

「!?何するん!？」

そして軽く離れた。

「これで問題ないよね？」

「何がって・・・え?・・・私・・・立ってるん？」

そこには、普通に立ってるハヤテの姿が。

「え・・・これって・・・」

「世の中には魔法も奇跡も有るんだよ?」

何処かの私って本当にバカな人のセリフを使った。

「え?え?あは、あははは・・・ほんまありがとうな・・・リュウ・・・」

泣きはじめた彼女をそつと座らせて泣き止むまで待った。

その後、聞いたのだが両親が他界してしまい、親族と名乗る男性が毎月お金を振り込んでいるらしくそれで生活を立てているらしい。

しばらくして大分遅くなったから帰ることにした。

「それじゃあ、またなハヤテ・・・そーいや学校どこ？」

「え？・・・私立聖祥大附属小学校やけど・・・」

「じゃあ同じだな、まだ治ったばかりだから無理せずに治して学校でまた会おうぜ？」

「・・・ほんまありがとうなりユウ」

「おう！そんじゃあな！今まで出来なかった分思い出沢山作ろうぜ！」

???
side

「お父様に伝えなくては・・・」

あの謎の少年。一体何者なのだろう？

だが止めるわけにはいかない。

物語は既に動きはじめていた。